

資料紹介

続 経済学者の追悼文集（四）

杉 原 四 郎

はしがき

本稿では12名の経済学者の追悼文集をとりあげるのだが、単行本は5冊、雑誌は9冊、それに全集（著作集）の内容見本が4冊である。全集や著作集が著者の生前に発行されることはわが国ではすくなくないが、歿後に刊行される時は、その内容見本に、何人かの人の故人に対する追悼のことばや、故人の業績を推薦することばが掲載されるのが通例である。ここではそのいくつかを紹介した。

I

(1) 上田辰之助（1892—1956）

『如水会会報』第320号，1956年12月号。

この号は上田辰之助特集とはされていないが「橋畔随想」につぎの三人の追悼文がおさめられている。

(1) 「上田辰之助博士の思出」，平井四郎。

平井は上田が不世出の語学の天才であったのにその豊かな天分の多くを発揮し尽くさず他界したことを惜しむ。ただ一つ平井のすすめで上田がした仕事である大英和辞典の編纂も、戦時中に殆ど活字になったが「残念乍ら戦禍を蒙って、それは遂に陽の見ないことになって了」った。もう一つ平井が書いているのは、上田が晩年「18世紀の英文学の研究（殊に社会経済思潮の現れとして）に傾倒され」、二論文を英文で発表したのが、それは上田の「英語で飛ぶなら高く飛ぼうという本領」をしめすものだといっている。

(2) 「老人というもの——故上田辰之助君のことども——」，水谷九二吉。

水谷は上田が「クリスティヤンとして幸福な余生を送っていた」として、つぎのように書いている。「人生の運不運は一に輪廻の因縁であって、この絆を逃れ出るのは全く信仰に入り菩提の心を求めるより外はない。上田君は生前キリスト教の中でも最も厳格と称せられて居るクエーカー教徒として入信し……妻も子もない寂しかるべき老後をいとも楽し

く明朗に送ったのは、聖書箴言にある『神を兄弟よりも楽しい友』の心境にあったものと思われ」る。

(3) 「上田辰之助先生を憶う」, 阿部定明。

阿部は、上田の死が「誠に突然の死に方で、先生自身も何ら準備をしておられなかった」とのべ、また上田が「学者として認められたことは語学力がすぐれていたからである。……トマスアキナスにしるマンデヴィルにしる、語学力による掘出しものであったとさえ言えるかも知れぬ」と書いている。又最後に文化人として上田について「先生の警句、ユーモア、だじゃれ」をとりあげ、「西にバーナードショウあれば東に上辰あり」と書き、「先生はすぐれたエッセイストであった」ともしている。経済学史学会の懇親会で聞いた上田のスピーチがなつかしく思い出される。

『英語青年』第1297号, 1957年3月1日, 故上田辰之助博士追悼, 122—125ページ。

つぎの8人の追悼文(その中4人は英文)が載っている。In Memoriam Tatsunosuke Ueda, Sanki Ichikawa; Tatsunosuke Ueda, H. Vere Redman; Ave atque Vale, Arundel del Re (Sydney); 「上田辰之助博士を惜しむ」, 斎藤勇; 「細心なひと上田博士」, 福原麟太郎; The Memory of His Friendship, R. A. Close (London); 「上田博士とクエイカー主義」, 安積得也; 「歳首懐人」, 伊東三代三。いずれも短文ながら、上田の人間性をあらわすエピソードをおりこんだ好エッセイである。

井原西鶴の墓の側に佇む上田の遺影一葉と門下生桶舎典男編の「年譜」(略歴と主たる著作)とがある。著作リストをみると、主著の他にも読みたいもの——上田はこの『英語青年』や『あるびよん』などにかずかずのエッセイを寄稿している——が多い。現在みずず書房から刊行中の著作集(板垣与一監修, 鈴木斐雄・矢島鈎次・菅原藤也編集, 全八巻, その第六巻はエッセイ集)が無事完結することが切にのぞまれる。なお著作集の内容見本には、略年譜と遺影二葉の他、都留重人「有識文雅の士」, 増田四郎「最もよき国際人・最もよき日本人」, 阿部志郎「開かれた思想と自己に厳しい生涯」, 安積得也「東西文明の融合」, 坂垣与一「監修者のことば」の5人の推薦の言葉が掲載されている。

(2) 黒正 巖(1895—1949)

黒正巖の追悼文集『黒正巖先生』はかつて紹介した(杉原『思想家の書誌』1990年5月, 日外アソシエーツ, 109ページ)。これは岡山大学の側で作成されたものであるが、黒正と関係の深い昭和商→大阪経済大学の側でも何かあると思い、竹本洋氏にたづねたところ、2冊の書物を送って下さった。それがここに紹介するものである。いずれも純然

たる追悼文集ではないが、それに準ずるものとして読まれてもよい内容である。

『黒正巖博士遺稿集』、発行大阪経済大学日本経済史研究所（所長鈴木亨）。1988年10月31日発行、非売品、B 6版177ページ。巻頭に故人の遺影とその筆蹟などの写真約20葉。その写真の中には、昭和39年大阪経済大学で建立・除幕された黒正の胸像とその碑文——当時の学長藤田敬三の撰文——との写真もある。

三橋時雄は「序」で、黒正が1933年京都に私財を投じて開設した日本経済史研究所の歴史をのべ、研究所創立50年を記念して「死後博士が岡山県下の各所で話された講演の草稿速記等……を集録した『黒正巖博士遺集』を編纂することになった」と書いている。また三橋と共に編纂に当たった山田達夫は「あとがき」で、『日本農政史』を中心とした遺稿集に収録したものは黒正先生の戦後の足跡のごく一部にしか過ぎない……（が）広範にして多彩な活躍を……窺うことができよう」といい、とくに「本書にその一部を収録した『羅村詩稿』は、昭和24年7月30日から9月3日、亡くられる当日までの日記風の漢詩集である」とのべている。

内容は「日本農政史」（6項よりなる）、「講演・随筆・詩歌」（13項よりなる）と年譜・著書論文目録から構成されている。私には「日本農政史」の中の「戸田海市先生——歴史と地理——」で、黒正が戸田の指導をうけて経済史と経済地理を研究したとのべていることが注目された。黒正は「京都経済学は戸田学派である」、戸田は「恐らく、明治、大正を通じて日本の経済学界において、最も偉い人だと思う」とのべている。

『道理貫天地——黒正巖先生の思い出——』、編集・発行大阪経済大学同窓会、発行日1987年11月3日、非売品、B 6版283ページ、巻頭に遺影など九葉。

大阪経済大学同窓会会長磯野齊の「はじめに」は、母校の創立50周年を迎えるに際し、初代校長黒正先生の人となりをもとめたとのべている。巻頭に宮本又次の講演「黒正先生学風と人物」をおき、つぎの『研学修道』は、黒正先生の生い立ちから晩年までを、大阪経済大学の歴史と絡ませながら、物語風にまとめている。書名の『道理貫天地』は黒正先生の一生を貫くモチーフであり、第二部の書名『研学修道』はこれから成長する若者たちに常に求められていたもののようです」とある。

「編集後記」（大阪経済大学同窓会広報部）によれば、この物語の資料は大阪経済大学編『半世紀のあゆみ』、『同窓会誌』、『会報』、『学友会誌』、『澱江』などである。

(3) 新庄 博（1902～1978）

『ミネルヴァ』新庄博先生追悼号、

『ミネルヴァ』は新庄ゼミのOBの会新庄会の会誌の特別号で、219ページの大判、ハードカバーの単行本の体裁をとったものである。1980年11月30日発行、編集兼発行人藤田正寛。非売品、巻頭に本人と家族の遺影をはじめ数十葉の写真、本文中にも多数の写真を挿入。

「遺稿集」、「弔辞」、「履歴・著作目録」、「追憶」(1) 家族・親族、(2) 先輩・友人、(3) 新庄会)の四部構成である。末尾に遺族新庄輝也・浩二の「あとがき」と藤田正寛の「編集後記」がある。藤田は本書が何とか一周忌に御墓前へと思ったが漸く三周忌に間に合わせることができた、その間に追悼文をいただいた一谷藤一郎、家本秀太郎、北尾政男が相ついで逝去したことは痛悼の極みだとのべている。

「遺稿集」は『夕刊大阪』や大学の新聞、『ミネルヴァ』などに寄せた随筆、昭和52年1月に「大阪クラブ」で講演した「教壇生活四十八年」などである。最後に約百首の短歌をおさめる。

「弔辞」は神戸大学長、同経済学部長、田中金司、野村寅三郎、則武保夫、および3人の外国人の友人、他に追悼の俳句と短歌など。「履歴・著作目録」には代表的著書7冊についての解説がついている。「追憶」の(2)先輩・友人のところ、高垣寅次郎の「学者の典型——新庄博教授を憶う——」、武市健人「新庄博君の想い出」、岡橋保「新庄さんを憶う」、家本秀太郎「新庄博先生を思う」、三上隆三「三分の一」、などが印象にのこった。とくにマルクスとケインズの両方にまたがっている新庄の理論体系の奥底にあるものを問いかけている家本の文章が忘れ難い。

(4) 大道安次郎(1903—1987)

『関西学院大学社会学部紀要』

大道は関西学院大学文学部社会学科→社会学部社会学科の教授を定年の1962年までつとめた。逝去後大道の門下生倉田和四生によって機関誌『社会学部紀要』に彼の業績についてのつぎの文章がのった。

「大道安次郎博士の人と業績」、55号、1987年7月。(1)教賀から関西学院へ、(2)学生時代、(3)果たされた役割、(4)研究分野と業績、(5)お人柄——出会った人々との交わり、の順序で大道の人と業績が紹介されている。(4)はスミス経済学の研究、アメリカ社会学史、日本社会学史、老人・病院社会学、都市の社会学的研究の5項目についてくわしく書かれている。スミス研究では処女作『スミス経済学の生成と発展』、三木清に捧げられた『スミス経済学の系譜』(学位請求論文)を中心にその業績が紹介され、三部作の構想のうちの第

3部（スミス研究の国際的影響）が未完に終わったことが惜しまれている。(5)で倉田は大道の三人の恩師新明正道と高田保馬と堀経夫に対する敬愛の情をのべ、最後に大道が大学の叙勲の推薦を辞退したとき「この時ほど大道先生が立派な学者に思えたことはなかった」とのべている。

倉田は『関西学院における社会学の歩み』を57号（1988年10月）と59号（1989年3月）とに連載、その中で大道の果たした役割を解説し、最後に小松堅太郎と大道とが人柄の上でも学問の性格も対照的であったことをのべて結びとしている。

『アダム・スミスの会会報』

大道はアダム・スミスの会の創立（1949年）以来の会員で、例会に熱心に参加していた。55号（1987年9月）には会長小林昇の「大道安次郎先生を悼む」と久保芳和の「『大道文庫』について」が、1984年3月17日の例会に出席した大道の写真とともにのっている。小林は『スミス経済学の生成と発展』を「これは独自の大道社会学がその殻の内部にはじめて宿した美しい真珠であった」とのべている。なお久保は『経済学史学会年報』第25号（1987年11月）にも「八面六臂の名学究」を書いて、故人が83年にわたる生涯の大部分を真摯な学究として終始したことをたたえている。

水田洋・杉山忠平編『アダム・スミスを語る』（ミネルヴァ書房、1993年）には対談や座談や討論などの中にわが国の代表的なスミス研究者が登場し、大道の名前も随所に出てくる。私もそこで大道の研究の特色や彼と私の出会いのことなどを語っている（133—136ページ）。

II

(5) 林 榮夫（1916—1983）

『追悼林榮夫先生』発行者林榮夫先生追悼文集刊行会、編集者刊行会編集委員会、発行日1985年1月21日。

A4版121ページ、非売品、巻頭に遺影一葉。

「あとがき」によれば、本書ははじめ1984年10月に刊行予定だったが原稿がおくれ、故人の命日の1月21日によりやく間に合った。都立大学林ゼミ有志が編集にあたり、資金は林ゼミと日本大学林ゼミOBの寄金によった。「多忙の中原稿を寄せて下さった柴田徳衛先生、並びに一行一文字に思いを込めて綴って下さった奥様に深く謝意を表したいと思います」とある。まず、1983年1月26日の葬儀にあたっての弔辞五通（東京都立大学経済学部部長金子ハルオ、日本大学副総長経済学部部長井手生、中央大学学長川口弘、大阪市大教授

宮本憲一、林ゼミ及門下生代表中桐宏文、つぎに1984年1月29日の「林先生を偲ぶ会」(東京、出席者62名)の記録があり、あとゼミ生の追悼文がつづくが、その最初に都立大学での同僚柴田徳衛の「林榮夫先生をしのんで」、最後に林榮子「御札にかえて」がおかれている。つぎに遺稿「わたしの研究遍歴」(有斐閣『書齋の窓』に連載されたが未完了った)、故人が1976年3月20日に林ゼミで語った「日本経済と今後の動向」、ゼミ生にあてた二通の手紙が紹介されている。最後に中桐宏文による「人と業績」があり、故人の財政学者としての主要な業績リストが解説つきでかかげられており、故人が重視した学会での活動、とくに財政学会での報告・討論(1949年から1973年まで)が紹介されている。最後に簡単な略歴でおわる。

宮本憲一は弔辞の中で、故人の代表作であり東京大学で学位を得た『戦後日本の租税構造』(有斐閣、1958年)が「資本制蓄積と租税の関係とシャープ勧告批判をあきらかにされることによって、従来の制度論ではなく、政治経済学としての租税論のあり方を提示された」とのべ、また『財政論』(『経済学全集』第18巻、筑摩書房、1968年)は、ドイツ財政学にもマルクス経済学にもケインズ経済学にもくわしい「教授の財政学の集大成であり、社会的余剰の分配過程としての財政の経済的機能をあきらかにするだけでなく、財政政策の立憲的な政治過程を体系化するという独自の成果」であるといっている。私は林が「研究遍歴」の中で「社会的経済余剰」の概念を中心とした租税・経費・公債論の「考察もほぼ完成に近づいてきたので、近く新著で詳しく論じたい」と語っていたが、1976年以降の病気のため実現できなかったのを知って、哀惜の念を強くした。

なお、林の財政学については佐藤進編『日本の財政学』(ぎょうせい、1986年)所収の「戦後の財政学」の中で、宮島洋が木下和夫の財政学とともにとりあげている。

(6) 麓 健一(1908—1971)

『商学論纂』(中央大学商学研究会)第13巻第6号、1972年3月、故麓健一博士追悼号、巻頭に故人の遺影一葉。

巻頭につぎの4人の追悼文がある。故人の友人の飯田繁と高木暢哉、商学部の同僚の石原忠男と井上達三。飯田は九州帝大の同窓であり、不換銀行券論争の当事者であるが、故人が『講座信用理論体系』の編集刊行、信用理論研究会の創立に全力投球したことをのべる。高木も五高、九大を通じての友人としての思い出と、やはり故人の『講座信用理論体系』への寄与の大きさを語っている。石原は商学部長として葬儀に際して弔辞を捧げたが、その中で故人が『信用創造理論の研究』(1953年、東洋経済新報社)で学位を得たこ

とや相撲部の部長として尽力したことをのべている。井上は一年上の同僚として商学部の発展に力を合わせたことを語っている。

寄稿論文6篇は貨幣・金融関係の内容のものが多く、巻末に建部正義が「麓健一先生の経歴と業績について」を書いている。それは、麓自身による「私の研究遍歴」（『金融ジャーナル』第5巻第12号、1964年12月）を利用しながら、著書9冊、論文46篇に及ぶ歴大な業績を解説している。巻末に「略歴および著作目録」がある。

故人は1950年突然脳卒中でおれたが、その後後遺症を克服しつつ大学に復帰、著述活動もつづけてきたが、1970年3度目の発作が起り、62歳で歿した。多くの仕事を残しての麓の死に、同病者としての私の胸は痛む。

(7) 松川七郎（1906—1980）

『統計学』第40号、経済統計研究会、1981年3月

松川七郎もその会員であった経済統計研究会は歿後4カ月立った1981年3月発行の『統計学』に大橋隆憲の「故松川七郎会員へのお別れのことば」——それは1980年11月17日東京千日谷会堂で読まれた大橋の弔辞である——と当日の葬儀次々と故人略歴と、「松川七郎先生著作目録」（『統計学』編集委員会）とを掲載した。1982年3月発行の第42号にも浦田昌計の追悼文がのっている。

大橋は其中で、彼が松川と知り合ったのは戦前の学生運動のいわゆる非合法組織の中においてであったこと、戦後松川が経済統計研究会の創立と発展に尽力したこと、松川から教えられたことは、歴史的・社会的研究の重視や、問題解決の確実な径は、問題の源流にさかのぼって古典にきくことにあるということだったことなどをのべている。

『「ボウウッド文書」の周辺——松川七郎を偲んで』、編集松川鶴子・細川敦子・土田淳子、発行松川鶴子、発行所産業統計研究社、発行日1992年11月7日。非売品、A4版75ページ。巻頭に著者の遺影と筆蹟および書斎と机の写真二葉、本文中にペティの手稿を調査したノートの写真五葉。

「ご挨拶」で松川鶴子は、亡夫が逝いて12年、13回忌を記念して「故人が最後まで心にかけていたことの一部を小さな形にまとめてみました」という。「調査ノートのことなど」で細川敦子は、「父はペティの子孫であるランズタウン侯爵家に伝わる、ペティ手稿や関連文書など、『ボウウッド文書』（Bowood Papers）と呼ばれるものにとくに大きな関心を寄せていました」こと、4回も渡英して、この文書を調査し、その成果を1977年に *Hitotsuhashi Journal of Economics* (XVII, 2) に公表した松川は、その後ボードルイアン・ラ

イブラリで作成された『レポート』(1980)に接して、自分が1969年に調査した時に作った『カタログ』とこの『レポート』の分類方法とを比較検討したいと思ったが、病気のため果たせなかったこと、今回その『カタログ』を紹介することなどが書かれている。

つづいて松川の二篇、*Rough Catalogue of MSS. of Sir W. Petty at Bowood House, transcribed by S. Matsukawa in May & June 1969*と「ウィリアム・ペティとその手稿」(『中央評論』第29号第1号, 1977年3月)とがおさめられ、そのあと大内兵衛「松川七郎教授の『ウィリアム・ペティ』」(『日本学士院紀要』第24巻第2号, 1966年6月)と著作目録・略歴がおかれている。大内の論文は1967年に日本学士院賞をうけた松川の『ウィリアム・ペティ——その政治算術=解剖の生成に関する一研究』の学問的価値についてのべている。著作目録と略歴は、『統計学』にのったものよりもくわしい。

本書に収録されている松川の「カタログ」の写真をみると、「時間さえあればもうすこしわかるが」とか「何とかして読みたい!……だれか助けてほしいものだ!」とか、解説作業の間の彼の率直な感想がでてきて胸をうたれる。そして彼が「ウィリアム・ペティとその手稿」の末尾で「原著者の生前に出版されたものはともかくとしても、誰かの手で編集され、公刊された遺稿を研究する場合には、……よくよくの注意が肝要だ」と書いていることを思い合わせたのである。

(8) 山田盛太郎 (1897—1980)

山田盛太郎の追悼文集は『専修大学社会科学研究所月報』のそれを本誌第44巻第1号(1994年4月)で紹介したが、別の雑誌にのったものを追加して紹介しておく。

『経友』、東京大学経友会第91号, 1981年9月, 「山田盛太郎, 追悼」(4—27ページ)。ここには遺影一葉とともに、つぎの4人の文章がおさめられている。

「弔辞」, 有沢広巳

日本学士院を代表して1981年1月15日に読まれたこの弔辞の中で、有沢は東大の一年先輩の助手として山田、大森義太郎の三人で「楽しい青春の毎日」を送ったこと、有沢の留学中に山田の「再生産理論に関する理論構成は完成しつつあった」こと、『日本資本主義分析』が日本資本主義の堅い岩盤に前人未踏のボーリングを打ちこんだ画期的な著作であったこと、山田が学士院の研究助成金をうけて三年前に着手した「戦後重化工業段階の基礎的研究」の完成をみずに——原稿を病室まで持ちこみ、気力をこめて最後まで加筆に執心」しながら——急逝したことなどを語っている。

「山田盛太郎先生の追憶——門弟として——」吉沢芳樹。

昭和23・24年の山田の演習に参加し、学部卒業後は特別研究生として五年間山田の指導のもとで理論経済学を専攻した吉沢は、山田の研究歴と自分の研究歴をふりかえりつつ、つぎのようなことをのべて、師弟関係の歴史をたどっている。学部の演習のテーマは『国富論』を中心とする地味なものであるが、「柔」型でなく「剛」型の山田は「学生を突き放し突き放しすることで学問の面白さよりもその厳しさを教えようとされた」こと、昭和26年9月から経済学部長になった山田は久留島陽三や吉沢に対し、政治的行動は慎しんで、「学問の中で政治的テーマを考えよ」と厳しく忠告したこと、吉沢が経済学史研究に入り込むのを山田は好まなかったが、山田は吉沢の論文に対し「いつもあの独特の山田文字で書かれた心温まるお葉書を下さった」ことなど。

「退学復学前後——私の山田盛太郎先生追想——」、佐藤経明

昭和25年のレッドパージ闘争さなかに、山田学部長と佐藤経友会委員代行との交渉が決裂して学生の大量処分となる。佐藤は退学の処分をうけるが一年後に復学する。その時の山田とのやりとりがくわしく書かれているのだが、最後に佐藤は「30年の歳月が流れた今日でも、渺たる一学生をあくまで対等の人格として遇された当時の先生のことを想うと、私は心のなかに何か熱く揺らぐものを覚えずにはおれない」と書いている。

「定年御退官後の山田盛太郎先生」、小林賢齊。

1957年3月東大を定年退官した山田は4月に専修大学に就職、翌年4月心筋梗塞で倒れるが、数カ月後に回復、「不死鳥は灰燼のなかに起つと云うまた零よりぞ出発する吾れは」と詠んで、戦後の日本資本主義分析に邁進する。この時期の山田の足跡をまとめたもので、戦後の山田の業績を知るうえに有益な文献。

(9) 良知 力 (1930—1885)

『一橋論叢』97—1, 1987年1月, 故良知力先生追悼号。別刷12+16ページ, 巻頭に遺影一葉。

「故良知力教授を偲ぶ」都築忠七。

都築は大塚金之助ゼミナールでの良知の兄弟子にあたる。都築によれば「良知君のゼミのときのテキストはミルの『経済学原理』だったそうだ。ミルの『原理』の第一版は1848年に出ており、このテキストの選定は、良知君ののちの関心の動向と無関係でないように思われる」。彼が法政大学から一橋に帰ってきて最初に発表したのがクチンスキーの『労働者階級の成立』の翻訳だったが、都築は、良知の「解説『労働者階級』への共感をつらぬく方法」を読むと、のちに『社会史』的と彼がもてはやされるようになったときの彼の

対象への接近方法が、明確に自覚的に示されているのがわかる」と書いている。都築はこの文章でその後の良知の社会史的研究の行方を追ってゆき、最後にこう結んでいる。「良知君は『青きドナウの乱痴気』とともに葬り去られてはならない。彼自身、それを越えようとする気迫、それが許されないことに対する無念さを隠そうとはしなかった。あの穏やかな笑顔のままで。その彼の無念さを受けとめ、彼の仕事を継承し、発展させること（ちょうど大塚金之助にたいして良知君が行ったように）、それがあとに残された者の課題であろう」。

この号には良知の門下生が多く執筆しており、最後に故人の経歴年譜と著作目録、嶋崎隆の編集後記がある。

『社会史研究』第7号、日本エディタースクール出版部、1986年12月「追悼・良知力」24—80ページ、最初に遺影二葉。

『社会史研究』編集同人（阿部謹也・川田順造・二宮宏之）の「別れのことば」は、良知が独自の歴史の見方をもっていたことを示すエピソードを紹介し、「今私たちは良知さんとともに四年間にわたって『社会史研究』を編集できたことが私たちの学問的生涯の幸せな四年間であったことをかみしめながら良知さんに別れを告げたいと思う」とのべている。

良知の翻訳遺稿「ハンガリーの破局——コシュートの政治的遺書」が、萩原直の解説を付して掲載されている。この1848年ハンガリー革命に関する文献を良知は1974年ウィーンで入手した。

最後に略年譜があるが、これは主要著作目録もふくんでおり、かつ故人の自伝的文章が9篇年譜の中に挿入され、問題意識の推移がわかるようになっていて有益である。

III

諸家の追悼文があつめられている小冊子として、故人の全集の内容見本がある。その実例として、田口卯吉(1855—1905)、堀江帰一(1876—1927)、大西猪之助(1888—1922)の全集の内容見本を紹介しよう。

1927年に『鼎軒田口卯吉全集』全8巻が出たが、その内容見本に、島田三郎、渋沢栄一、阪谷芳郎、久米邦武、伴直之助ら17名の追悼文がのっている。その多くは『東京経済雑誌』に掲載された文章からその一部を抜粋したものである。高野岩三郎のものは“The International Supplement of the Tokio Imperial University News, p. 9”にのった Champion of Economic Liberalism と題するつぎの文章である。

Needless to say, the Meiji Restoration was not only a political reformation; it was an economic one as well. Since the beginning of the Meiji era, American and European Capitalism was ardently applied for in Japan and commerce and industry suddenly became active. It is not to be wondered at that the Adam Smith school of Economics, appropriate to that age, prevailed in the country. Mr. Ukichi Taguchi, who by inculcating Economic Liberalism in his Tokyo Keizai Zasshi (The Tokyo Journal of Economics) dominated the world of Economics' is in deed, to be regarded as a champion of that period.

塩島仁吉の「東京株式取引所と鼎軒先生」は『鼎軒田口先生伝』の一節、河上肇「学史中の学者鼎軒先生」は『国家学会雑誌』から、吉野作造の『時勢論』に就いては『社会科学研究』第1号からの転載である。なお『東京経済雑誌』や『我等』にのった田口卯吉の追悼文については、他の機会にまとめて紹介したい。

1928—29年に公刊された『堀江鼎一全集』全10巻（改造社）の内容見本には、高橋誠一郎の「故堀江鼎一博士」をはじめとして、山崎覚次郎、井上準之助、林毅陸、奥村信太郎、武藤山治、鈴木文治、気賀勘重の8人の文章があつめられている。全集の推薦文という色彩がつよいが、つぎのように親友奥村信太郎の文章もある。

「堀江君は17歳の時に、アダム・スミスの富国論の原書を、田口卯吉氏の訳書をたよりに、根よく読破して私達同級の者を驚かした。この熱心と努力とが堀江君の一生を貫いて銀行論、貨幣論等の名著をはじめ長からぬ生涯に学界の驚異とも言うべき多数の文献を遺して死んだ。単に書齋の人でなく、街頭の先覚者として実際問題を縦横に論評した経済論は、総合すれば好箇の現代経済史とも言えるであろう。私は今その全集の成るを見るにつけても、今更ながら傷心の想いに堪えない」。

『大西猪之介経済学全集』（全11巻、宝文館、1927年）の内容見本には、関一、福田徳三、津村秀松、上田貞次郎、下村宏、丸谷喜市、大内兵衛、左右田喜一郎、手塚寿郎、越辺龍聖、佐野善作、小泉信三、伴房次郎、武田英一、太田正孝、坂西由蔵の16人の文章がおさめられている。これらの文章はいずれも大西の人と学問を語ってかなり詳細な内容のもので、田口や堀江の全集の内容見本にのっている推薦文よりはずっと読みごたえのある、書き下しのものばかりである。ここでは下村宏と大内兵衛の文章を抄録しておこう。

「『大西はどちらかといへば、哲学者でした。頭のよい男で、ローマに來た当座はイタリア語は少しも話せなかったが、2、3カ月するうちに可なり複雑なることをも、イタリア語で弁じ得るようになってゐた。経済学についても屢々議論をしたが、独逸で仕入れた

批評哲学でイタリー経済学を批評しようとする彼の態度にはどうしても賛成でされなかった……』。

これは学友関西大学の岩崎卯一君が羅馬にイタリー経済学界の權威たるパンタレオニ教授を訪ふた会見記の一節である。

いかにも恩師津村博士を眼の前に置いて、博士の国民経済学原論を糞味噌にコキ卸したり、『囚はれたる経済学』を公にして虹の如き気焔をあげながら、しかも其恩師に深く愛着せられてゐた大西猪之介その人を見るような気がする(下村宏「万人よろしく此の徹底した新人哲人才能の書に親しむべし」)。

「私が学校を出る頃、やはり学校を出たばかりの大西君の『帝国主義論』が出た。当時学問をして見たいといふ希望を持ってゐた私は、この書を読んで驚いた。その博引とその文章の力強さとに。そして私は考へた、吾々のような鈍頭が学問で身を立てるなどと云ふ事を考へるのは学問への冒贖であり、天才への侮辱であり私の非望であると。……巻を措いて『我が国の経済学界最も有為にして多望な才人を失へり』の嘆を久しうしたのである」(大内兵衛「大西君の思い出」)。

私がかつて、堀江帰一と大西猪之介との全集について、その内容を紹介したことがある(杉原『近代日本経済思想文献抄』(日本経済評論社、1980年、282—283ページ)が、本稿はそれを補足するものでもある。